其角と老荘

広田二郎

蕉門の鬼才其角も『荘子』の影響を多大に受けた作者である。しかし、彼についても師の芭蕉と同じく、延宝七年頃までは、『荘子』の影響を作品に見出すことができない。その自筆の略年譜十六才の条には

服部平助講述。
円覚寺大巓和尚詩学、易伝授。

とあるのでその頃から儒学を学び、詩や易について教えを受け、かたわら、あるいは『荘子』の講義を受けたことがあるかもしれないとは考えられるが、（服部平助は儒者で寛斎と号した）、少くともそれは彼の文学に影響を与えるほどのものではなかった。延宝七年十二月刊『坂東太郎』（椎本才丸撰）に見える其角の句は次のようなものである。

朝鮮の妹や摘むらん葉人参
なら茶の詩さこそ盧同も雪のはて
雁鹿虫とばかり思ふて暮けり昏

従来の談林調を超えようとする新風の萠芽を早くも示しているので注目される作品ではあるが、ここにはまだ『荘子』の思想も語句も表現も影を落していない。しかし、『坂東太郎』が刊行された延宝七年（其角十九才）は、芭蕉を中心として蕉門全体が『荘子』の探究に真摯に入りこんでいった年であった。(1) その翌年初夏に上梓された

『桃青門弟独吟二十歌仙』には、あふれるように多く『荘子』の影響が現出し始める。中でも其角は最も多く『荘子』の寓言や語句をとり用いて、奇警清新な作風を先駆的に示した。

鈍斎（ドンサイ）のねごと集にもなかり鳧
　退屈（タイクツ）和尚にま見えて曰
　　灸を以て心をすへてすへ殺し
　　目口の出来し瘤（コブ）更に瘤
小鬢（ビン）国耳のひんがしに当レり　（月花ヲ医ス歌仙）

ここに見られる「鈍斎」・「退屈和尚」・「ねごと集」などという滑稽な架空の個有名詞は、「荘周が文章にならひ」（宗因、荘子像讃）寓言を用いているつもりなのである。（ほかに、この歌仙には「菓子屋山看板寺」というような同類の架空個有名詞も見られる。）また「灸を以て心をすへてすへ殺し」に「目口の出来し瘤更に瘤」と付けたのは、『荘子』「応帝王」篇の渾沌が七竅をうがたれて死んでしまったという譬喩を取って翻案したものであり、「瘤更に瘤」というのは、『荘子』「駢拇」篇の

　附贅県疣、出二乎形一哉。而侈二於性一。（附贅（いぼ）・県疣（たれたるこぶ）は形より出でたる哉。而れども性に侈（あ）まれり。）

を俳諧化したものである。これに「小鬢国耳のひんがしに当レり」と付けたのは、『荘子』「則陽」篇に語られている蝸牛角上の触蛮国の寓言の翻案である。(2)

このように、其角は、その作品中で、他の誰よりも多く『荘子』とのかかわりを示している。しかし、そのかかわり方は、『荘子』の寓言的な個有名詞の命名法にならい、また渾沌（応帝王）、附贅県疣（駢拇）、触蛮国（則

陽）等の譬喩を取って翻案し、語句をただちに取って句中に用いるという外面的なものでしかない。まだ談林作風の伝統的立場から脱却し得ず、『荘子』の俳諧化ということは、外面的な滑稽化と同意味にしか考えていない。つまり、彼はまだ『荘子』を奇抜でおもしろい寓言の書として受けとり、その表現の自由さ、奇抜さにひかれて表現面のおもしろさに遊んでいるにすぎないのである。これはいうまでもなく林註による『荘子』の受けとり方であり、宗因・惟中以来の談林の伝統による『荘子』の解釈のし方である。それ故、『荘子』とのかかわりは、内面的なものを持ち得ず、単に表現方法の面で接するにとどまっているのである。従って、作品は右に見られるように、談林風とは異質の新風の萠芽を示してはいるが、依然として滑稽感を主としてねらうものになってしまっているのである。しかし、一挙に従来の強力な伝統を超克しきってしまうことはできるものではない。惟中的な『荘子』とのかかわりを超克するには、まず一度惟中的な立場に入って、さらにそこから脱化してゆかなければならなかったのである。

新風の展開と、その理論的根拠を探究しようとする芭蕉とその門下の一体となった努力は、やがて彼等と『荘子』とのかかわりを表現方法論から一歩進んで、内面的な面へと迫らせていった。そうした状勢の中にあって、芭蕉と其角・杉風等はその先導者的地位に立っていった。そうして、『桃青門弟独吟二十歌仙』についで、延宝八年、其角と杉風の自句を合わせた『俳諧合』を出した。この中の其角の『田舎之句合』、第六番、右

鳶に乗て春を送るに白雲や

は、幾重にも『荘子』とのかかわりを持っていることが注目される。一句の意味は、判詞で芭蕉が解釈指摘しているように、『荘子』の

若夫乗二天地之正一、而御二六気之弁一、以遊二無窮一者、彼且悪乎待哉。（もしそれ天地の正（み）に乗り、六気の変（へんか）を御

し、以て無窮に遊ぶ者は、まさになにをか待まんや。）　（逍遙遊）

に拠って「逍遙遊」の思想を述べているのであるが、「鳶に乗て」という表現は、なお、

予方将下与二造物者一為レ人、厭則又乗二夫莽眇之鳥一、以出二六極之外一、而遊二無何有之郷一以処中壙埌之野上。（予まさに造物者と人となり、厭けば則ち又かの莽眇の鳥に乗り、以て六極の外に出でて無何有の郷に遊び、壙埌の野に処らんとす。）　（応帝王）

且夫乗レ物以遊レ心、託レ不レ得レ已以養レ中、至矣。何作為報也。（且つそれ物に乗りて心を遊ばしめ、已むを得ざるものに託して中なるものを養はば、至れり。何ぞ作を為報せん。）　（人間世）

の「乗二彼莽眇之鳥一」、「乗レ物」などとも関連があるであろう。また「白雲や」という表現は、

乗二彼白雲一至二於帝郷一。（かの白雲に乗りて帝郷に至る。）　（天地）

出二六極之外一、而遊二無何有之郷一　（応帝王、前出）

藐姑射之山、有二神人居一焉……乗二雲気一、御二飛龍一、而遊二四海之外一。（はるかなる姑射の山に神人の居るあり。……雲気に乗り、飛龍を御して、四海の外に遊ぶ。）　（逍遙遊）

とも関連があると見られよう。さらに「春を送るに」は、ただ単に季を入れる必要からいわれたにすぎないというものではなく、

是之謂二真人一若レ然者……喜怒通二四時一、与レ物有レ宜。（これをこれ真人といふ。然るがごとき者は……喜怒四時に通じ、物と宜しきことあり。）　（大宗師）

相与為二春秋冬夏四時行一也。（相ともに春秋冬夏四時の行をなすなり。）　（至楽）

などといった『荘子』の思想につながりを持って表現されたものであろう。林註では、逍遙遊の意味を、高く世俗を離れて、優游自在、心の天遊を楽しむことであると説いているが、其角も林註によって逍遙遊の境地を一句に述べようとしているのである。それ故にこそ、芭蕉も判詞に

右の句の鳶にのって無窮（ムキウ）の空々たるに逍遙せん事、楽、猶窮なかるべし。

と評しているのである。それにしても、単に「逍遙遊」篇の一部分を切り取って翻案するだけではなくて、その思想の最もよく表現されている譬喩を取り上げて俳諧的表現を与え、その表現にはまた『荘子』の各篇から自由に語句・表現を選び上げ、意味を採り、幾層にも複雑な構成を組み上げているのである。大変巧妙複雑な知巧的表現というべきで、当時の芭蕉にも深い感銘を与えたもののようである。芭蕉は翌年『次韻』で、其角の「子丑の番を寅に預ヶて」に

渾沌（ヌベッポウ）翠（ミドリ）に乗て気に遊ぶ　（稲負鳥百韻）

という句を付けているが、それが其角の右の発句の表現の構成や、『荘子』とのかかわり方に影響されていることを見落すことはできないであろう。

次に同句合、第九番、左

壁の麦葎千年をわらふとかや

も、「逍遙遊」篇の寓言を翻案したものである。

小知不レ及二大知一、小年不レ及二大年一、奚以知二其然一也。朝菌不レ知二晦朔一、蟪蛄不レ知二春秋一。此小年也。楚之南、有二冥霊者一、以二五百歳一為レ春、五百歳為レ秋。上古有二大椿者一、以二八千歳一為レ春、八千歳為レ秋。而彭祖乃今以レ久特聞。衆人匹レ之、不二亦悲一乎。（小知は大知に及ばず、小年は大年に及ばず。なにを以て其の然るを知る

や。朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず。これ小年なり。楚の南に冥霊といふ者あり。五百歳を以て春と為し、五百歳を秋と為す。上古に大椿といふ者あり。八千歳を以て春となし、八千歳を秋となす。しかるに彭祖はすなはち今久しきを以て特に聞ゆ。衆人これに匹はんとするは、また悲しからずや）　（逍遙遊）

「壁の麦」は、右の文中の「朝菌」を俳諧化したものであるが、これは林註の

朝菌、犬芝也。亦名二日及一。生二於糞土一。

から思いついたものであろう。また「わらふとかや」という表現は、鵬の図南を蜩や学鳩や斥鴳などが笑ったという譬喩によっているのである。

蜩与二学鳩一笑レ之曰、我決起而飛、槍二榆枋一。時則不レ至、而控二於地一而已矣。奚以之二九万里一而南為。（蜩と学鳩と之を笑ひて曰く、「我決起して飛び、榆枋を槍く、時としては則ち至らずして地に控せらるるのみ。なにを以て九万里に之りて南することを為さん」。）　（逍遙遊）

斥鴳笑レ之曰、彼且二奚適一也。我騰躍而上、不レ過二数仞一而下、翺二翔蓬蒿之間一、此亦飛之至也。而彼且二奚適一也。此小大之弁也。（斥鴳之を笑ひて曰く、「彼まさに奚にか適かんとする。我騰躍して上るも、数仞に過ぎずして下ち、蓬蒿の間を翺翔す。これ飛ぶの至りなり。而るを彼まさに奚にか適かんとする。」と。これ小と大との弁なり。）　（逍遙遊）

「壁の麦」の句は、「小知不レ及二大知一、小年不レ及二大年一」という「小大之弁」の意を俳諧化したものである。それ故、芭蕉もこの句に対して

壁に生ふる麦は、朝菌の晦朔を知らず、冥霊大椿を論ずるに似たり。

と判している。この句作に際し、其角は朝菌と冥霊・大椿の寓言に拠るばかりでなく、蜩・学鳩・斥鴳などの譬喩も併せ用いている。また「葎千年」という表現は大樗や商丘の櫟樹の「無用の用」をもって天年を保つという譬喩をも重層的に用いているのである。このように第九番左「壁の麦」の句も、第六番、「右の鳶に乗て」の句と同様な、複雑知巧を極めた表現手法によって作句されているのである。

そこで、この二句に通ずる作句法から当時の其角の『荘子』に対するかかわりの在り方を見てみよう。其角は、ここでは『荘子』の心――思想をそのまま丸のみにして俳諧化することに終始している。俳諧化といっても、完全な発句となっているかどうかは疑問であって、要するに『荘子』の思想を俳諧的なスタイルで陳述したまでであって、散文とも何とも見わけのつかないようなものである。勿論、これは彼等が志向していた破調の句体であるということではあろうが、それにしても寓意があらわにすぎて詩的な昇華が十分になされていないといわなければならない。其角がいかに熱心に『荘子』をそのまま俳諧に翻案することを急いでいたかを示すものである。

しかし、同じく翻案といっても、半年前に刊行された『桃青門弟独吟二十歌仙』におけるそれが、ただ単に寓言の奇抜さに興じているだけであったのに比し、ここでは、思想内容を問題とするに至っている。そこに彼の『荘子』探究の深化と、俳諧観の飛躍的進歩のあとが見出される。彼は『荘子』の逍遙遊の思想に目が開け始め、これに関心を集中している。「高く世俗を離れて遊ぶ」ことにあこがれ（鳶に乗て）、「無用の用」の意味を知って超俗の生き方に天年を完うすることを知ろうとする（壁の麦）。それには「知三天地之外、有二如レ許世界一」（林註）ということが必要であるが、世俗の小人どもはかかる大知を知り得ないとし、「小年不レ及二大年一」、「小知不レ及二大知一」という『荘子』の言はまことなる哉と感銘しているのである（壁の麦）。こうして、彼は『荘子』的世界の一端を垣間見た感動と衿

恃から、極めて高踏的な態度をそのまま揚言してはばからない。しかし、その表現を見るとすべて「虚」の句、(8)すなわち、寓言的表現の句である。『荘子』の寓言の奇抜さに心をひかれ、その翻案に知巧のかぎりを尽くし、「作のうちに作有」（常盤屋之句合、第十八番判詞）る表現技巧の発揮に力をそそいでいる。表現技巧は『荘子』のことばや思想を幾層にも裁ち込み、巧妙を極めているが、その表現のうちに含まれている思想は、まだ観念的に鵜呑みにしているにすぎない。青年（時に其角は二十才）の客気と野心で『荘子』を頭で受けとっているので、まだ未熟で、類型的で、内面的なかかわりにまでは至っていない。しかし、ともかくも『荘子』を、表現において学ぶだけでなく、「虚の中に実をふくめり」といわれているように、その思想内容をも自らのものとしようとし、これを形象化し、時代にさきがけて、前進の歩を進めていることは、その表現の張りの強さとともに、みごとと称すべきであろう。

翌延宝九年、二十一才になった其角は、すでに蕉門において頭角をあらわし、同年に成った池西言水撰『東日記』には多くの作品を採られた。この撰集は、谷素外の『歯がため』によれば、其角が板下を書いたというが、そのことでも知られるように、新風の一方の雄言水と親しく、それで採られた句数も多くなったということもあったかもしれないが、実に二十八句を数えるのである。その中には次のような作品も見える。

読二荘子一

彼レ是は嵐雪の偽花のうそ

この作品に見られる「読二荘子一―偽―うそ」という関連は、岡西惟中の寓言説の根拠となった林註の一節に典拠を有する。

如レ此推尋、転見二迂誕一、不レ知二此正荘子滑稽処一、如今人所謂断頭話。正要二学者如レ此揣摸一、前後解者、正

落二其圈櫃中一、何足二以読二荘子一、其実皆寓言也。

（逍遙遊）

この一節の「（何足以）読荘子、其実皆寓言也」から、「読二荘子一彼レ是は嵐雪の偽花のうそ」が引き出されたのであるから、両方から「読荘子」を引き去れば発句は寓言と等価になるわけである。上五の「彼レ是は」というのは、「斉物論」篇の彼是方正之説の語句を取り用いたものである。『田舎之句合』の序に見られるように、嵐雪は「斉物論」の論法めかした表現を好んだようであったから、其角はそれをほめ上げ、『荘子』を読むと、その寓言のおもしろさから嵐雪の句の奇抜な表現が思いうかべられるといっているのである。この其角のわかったような、わからないような表現もまた意識的に「斉物論」の表現にならったものであろう。ずい分作為をこらした作品であるが、まだ其角が俳諧観において惟中の俳諧寓言説が立てた俳諧＝寓言（虚↓↑実）という思考のパターンから脱皮しきれず、試行錯誤を繰り返している状態を示したものと考えられる。芭蕉の作品でさえも『東日記』においては

五月雨に鶴の足みじかくなれり

愚に暗く棘をつかむ螢かな

といった程度のものであったから、其角がまだこのあたりの壁につきあたり、これを突破できないでいるのもやむを得ないことであったろう。しかし、其角・芭蕉の句とも、延宝九年より以前の作であるかもしれず、これらの作品で『俳諧合』の線よりも後退したとは必ずしも断定できないであろう。

『東日記』において、其角との親交の深さを示した言水は、また『荘子』に深い関心を持っていた。彼自身も、この撰集に

蝶飛で獏（バク）ざれかゝる気色哉

という句を載せている。また、同書に序文を書いた才丸も、『荘子』を読んでいたことは、その序文に引用した「斉物論」の一節からも知れるし、さらに「至楽」篇の空髑髏の寓言によった

　下野の国に行脚しける比、出流(イツル)が原に草枕して

　心覚(サメ)て蓬霜枯の古髑(カバネ)

の句があることからも窺える。このように、芭蕉だけでなく、当時俳風革新の第一線に立っていた有力作者達もまた『荘子』を読みつつあり、其角はこれ等の作者達と風交を持つことによって、その『荘子』探究熱に一層の油をそそがれたものと推察される。

『東日記』が出て間もなく、『俳諧次韻』二百五十韻が芭蕉・其角・揚水と才丸によって作り出された。最初の五十韻は、芭蕉の

　鷺の足雉(キジ)脛(ハギ)長く継添て

で始まっている。これを受けて、其角は

　這(コノ)句以(テ)二荘子一可(シ)レ見(ッ)矣

と付けた。芭蕉の句が、『荘子』「駢拇」篇の「鳧脛雖レ短、継レ之則憂、鶴脛雖レ長、断レ之則悲」（鳧(かも)の足短しといへども之を続がば則ち憂へん。鶴の足長しといへども之を断たば則ち悲しまん）に拠っていることを明らかにしたものである。

『次韻』は巻末の余興四句でも

　附贅(イボ)一つ奚に置けり曰ク露　　揚水

無用の枝を立し犬蘭　　桃青

夜ル貞八の朝咲花にあらそひて　　其角

塵裡（デンリ）の四虫音を隠る也　　才丸

と「駢拇」篇の附贅県疣・駢拇技指の譬喩をモチーフとして付合を展開していっている。このように、『次韻』は冒頭と巻末に『荘子』傾倒を旗じるしとしてかかげた異色の二百五十韻であるが、その中に、其角も一句『荘子』に拠った句を付けている。

玄又（フカク）玄し龍頭の国　　才丸

俗のいふ鹿島の海の底なるや　　其角　（世に有て百韻）

才丸の句は『老子』体道章第一の

玄之又玄、衆妙之門門。（玄の又玄は、衆妙の門なり。）

に拠ったものであるが、これに付けた其角の句は、「玄又玄し」を受けて『荘子』の

世俗之所レ謂然、而然レ之。（世俗の謂ふところの然にして、これを然りとす。）　（天　道）

此世俗之所レ謂知也。（これ世俗の謂ふところの知なり。）　（胠　篋）

などに拠ってその表現を考え出したものであろう。「天道」篇には、

深之又深、而能物焉（深の又深にして、よく物たり。）

などとあって『老子』の「玄之又玄」と思想・表現において連関するものを持っているので、そこから、同篇の「世俗之所謂……」というような語句を思いおこして来たのであろう。しかし、この付合は、何かもったいぶった表現が目

につくだけで、老荘とのつながりは語句の形の上だけのことである。これは前句の才丸の句が『老子』の語句を取り用いながら、その内容にかかわる所のない句であったからである。しかし、あえて「俗のいふ」という口ぶりを示したところに、古風、談林の俗流俳諧を見下し、おのれの作風をひとり高しとする意識がうかがわれるであろう。

『次韻』において『荘子』とかかわりを持った句を、四作者通じて見ると、「逍遙遊」の思想を中心とし作句し、「駢拇」篇の発想法も大きくとり入れていることがわかる。これ等の思想内容は、すべて翻案することを通して俳諧化され、また、その表現は『荘子』各篇の語句を取り用いて知巧性と屈折を与えられている。かくて出来上った句は、ほとんどすべて談林風には見られなかった新しい寓言的な表現様式を得て来ている。『俳諧合』の中の芭蕉の判詞を借りれば、「作のうちに作有て、虚の中に実をふくめり」という風体が形成されて来ている。『田舎句合』における達成を連句創作においても実現しているのである。かくて、寓言論は、談林的な遊戯文芸観を越えて、実（理）をとりもどしつつあり、俳諧観の内面を支えるものに転化して来ているのである。この達成の上に立って、次の『虚栗』における作風の新展開がなされてゆくのである。

天和三年、二十三才になった其角は、その第一撰集『虚栗』を出して、蕉門第一の高足としての評価をかち得た。勿論、芭蕉の懇切でしかもきびしい監修があったであろうが、そこには紛う方もなき其角の個性が示されている。この撰集にも、芭蕉は『荘子』に典拠を持つ作品を出している。ほかに麋塒・揚水・楓興・瓠落・鼓角なども『荘子』の寓言に拠り、その語句を用いた句を採られている。其角自身も

我句人しらず我ヲ啼クものは子規

という句を出している。

これは

世人以二形色名声一、為レ足三以得二彼之情一。夫形色名声、果不レ足三以得二彼之情一、則知者不レ言、言者不レ知、而世豈識レ之哉。（世人は形色名声を以て、以て彼の情（まこと）を得るに足るとなす。されども、夫れ形色名声、果して彼の情を得るに足らざれば、知る者は言はず、言ふ者は知らず。而かも世、豈に之を識らんや。）

（天　道）

に拠っているのであるが、林註では原文を解して後に、

故知レ道者必不レ言、而有レ言者、必非二知レ道者一也。今世人、其識見豈及レ此、所二以可レ悲也。

と嘆じている。新風展開のためにあらんかぎりの力を尽くし、これこそはと思う作品を世に問うても、世人は既成の俳壇における声価や地位によってのみ判断し、わが句の真価を知る人はない。俳道廃れたり、という嘆きを持っていた其角には、「天道」篇のこの一節と、その林註とは、まことに己れの思う所を言い得ているものと思われたたに違いない。句は少し悲壮感がすぎているようにも思われるが、たしかに当時の俳壇やこれを取り巻く世人は、まだ旧態依然として貞門・談林の風の中にあって、天和初年の其角等は常に少数派としての悲哀感を身にしみて感じ続けていたに違いなかったのだ。それ故、「我句人しらず」で、我句を知って、共感の声を発してくれるものは、あの子規だけだと、実感に立って訴えているのである、「所二以可レ悲也」を、啼く子規によって表現したのは、かなり真実感を告げ得ているといえよう。『荘子』にことばを取った寓言的表現が、このように真実感表現の方法にまで高められて来ているのである。これは、本書所収、芭蕉の偃鼠の句と同傾向を行く作風である。この子規の句と序の

嚙テ二古一人貧一交一行ノ之詩ヲ一吐テ而戯序ス

翻セバレ手ヲ作リレ雲ト覆ヘバレ手ヲ雨
紛々タル俳句何ゾ須ケンレ数フ
世不ヤレ見宗鑑ガ貧ノ時ノ交ハリ
此ノ道今ノ人棄テ如シレ土ノ
汎よ世に拾はれぬみなし栗

と関連させて読んでみると、二句間に内容の共通性があることがわかるであろう。いずれも『虚栗』で評価が定まる以前の新風模索時代の其角の気負いと悲壮感をうかがうに足るであろう。しかし、それは卑屈や無力感とは関わりのない、むしろ「無用之用」の思想に立つものである故に、人に知られなくても、拾われなくても、真価は自ら知っているのだとの自負を示している。そう見てみると、書名の『虚栗』も、やはり老荘的な「無用之用」に立つ世界観を背景として持っていると考えられるものではなかろうか。

『虚栗』で其角は芭蕉とくつわを並べて、『荘子』を典拠とし、『荘子』の語句を取り用いながら、表現に文学性を与えるところまで進み得た。その内容はまだ純熟してはおらず、表現もまた生硬ではあるけれども、ここで談林寓言論の俳諧観と方法論を超克することができた。かくして天和調が築かれたのであるが、これを基礎とし、やがて更にその上に蕉風を開いてゆくことになるのである。もっとも、これは芭蕉や其角のように特にすぐれた資質を持った作者のみがなし得るところであった。『荘子』をおなじく典拠としながら、『虚栗』でも麋塒・揚水・鼓角・瓠落・楓興などは、まだ『東日記』・『次韻』といったあたりのレベルに停滞しているのを見るのである。

『虚栗』によって蕉門第一の高足としての名声・地位を確立した其角は、翌貞享元年、二十四才の二月十五日に江

戸を出立し、東海道を西上、美濃・伊勢を経て京都に至り、同地の俳人と風交を重ね、さらに大阪に出て、六月五日、井原西鶴の住吉社前での一昼夜二万三千五百句の矢数俳諧の後見人の一人となるなど、一流俳人としての活躍ぶりを示した。秋江戸に帰ったが、この年は、右のように大半を旅泊のうちに過した。翌貞享二年、二十五才の五月、箱根木賀山に病気の療養に滞在した。深川の木場あたりに嵐雪や破笠と八畳一間に同居し、鍋一つに炮録一つだけの放縦な生活をしたというのもこの前後のことだったという。六月には、芭蕉のさばきで、尾花沢から出府した鈴木清風らと古式之俳諧一巻を巻いた。

貞享三年春、彼の

日の春をさすがに鶴の歩み哉

を立句として「丙寅初懐紙百韻」の興行があった。三月、芭蕉庵において「蛙合」興行。衆議判に加わる。

こうして其角は貞享に入って初めの頃は、旅に出たり病気になったりの状態で虚栗調の延長線上にあったが、野ざらしの旅から帰った芭蕉が深川に落ちついて門下を指導するようになってからは、その句風に同化され、次第に蕉風へと醇化されていった。芭蕉は、この期間に『荘子』に静かに、深く沈潜していったが、其角は『虚栗』作風から脱皮するにつれて、文学や世界観の問題をとくに『荘子』に限定して問いかけてゆくことはなくなっていったようである。貞享以後は、もはや以前のように真摯熱烈に『荘子』に挑みかかった作品は見られなくなっている。しかし、知識・経験・教養を積み重ねてゆくうえに、その一要素として『荘子』を摂取することは続けていったようである。『蛙合』興行に一座した折には衆議判の一員として、第二番、右の判詞、

游泥の中に身をよごして、不才の才を楽しみ侍る亀の隣のかはづならん。

は、『荘子』「秋水」篇の

荘子釣二於濮水一。楚王使二大夫二人往先一焉。曰、願以二境内一累矣。荘子持レ竿不レ顧曰、吾聞、楚有二神亀一、死已三千歳矣。王巾笥而蔵二之廟堂之上一。此亀者、寧死為二留レ骨而貴一乎。寧其生而曳二尾於塗中一乎。二大夫曰、寧生而曳二尾塗中一。荘子曰、往矣。吾将曳二尾於塗中一。（荘子、濮水に釣りす。楚王、大夫二人をして往きて先んぜしむ。曰く「願はくは境内（くにのうち）（の政務）を以て累はさん」と。荘子竿を持ち、顧ずして曰く、「吾聞く、楚に神亀有り。死してすでに三千歳なり。王、巾笥もてこれを廟堂の上に蔵すと。この亀は、むしろ死して骨を留めて貴きを為さんか。むしろそれ生きて尾を塗中に曳かんか」と。二大夫曰く、「むしろ生きて尾を塗中に曳かん」と。荘子曰く、「往け。吾はまさに尾を塗中に曳かんとす」と。）

に拠るものであることを、聞きもし、見もしたことであろう。

翌貞享四年十月十一日、『笈の小文』の旅に出立つ芭蕉への餞別の四十四が興行された。

十月十一日餞別会

旅人と我名よばれん初霜　芭蕉

亦さゞん花を宿〳〵にして　由之

鷦鷯（カマクキ）の心ほど世のたのしきに　其角　（続虚栗）

由之の脇に付けた其角の第三は、いうまでもなく『荘子』の鷦鷯一枝の譬喩によっている。この「鷦鷯巣二於深林一、不レ過二一枝一、偃鼠飲レ河、不レ過二満腹一」（鷦鷯は深林に巣くふも一枝にすぎず、偃鼠は河に飲むも満腹にすぎず）という譬喩は、林註には「外物を以て自ら其の身を喪はざる」許由自身の自足の心境をいうものだと解説されて

いる。其角は、やはりこの林註によって鷦鷯一枝の譬喩を受けとっているので、前句「亦さゞん花を宿〳〵にして」に「鷦鷯の心ほど世のたのしきに」と付けているのである。発句とは打越しの関係にあるから、直接芭蕉のことをいったとはいい難いであろうが、意識の底には、やはり「自足・自得」の境位に達していた師のおもかげをそこはかとなく抱いて付けたものではないだろうか。それはともかく、二十七才冬の其角は、やはり、これだけ落ちついた句を作り、『荘子』とこのような内面の交りを持つことができるまでになってきていたのである。この四十四を収めた『続虚栗』に、

李白に募る盞の数　　野馬

俳諧の誠かたらん草まくら　　其角　（啼く〳〵もの歌仙）

という付合がある。「俳諧の誠」に思いを致すようになった其角の俳諧観は、貞享年代の俳諧の史的発展の中で形成されたものであったことはいうまでもないが、おのずからそうなったのではなく、芭蕉の指導や其角自身の努力・修練の結果として得たものでもあった。こうした「誠」にもとずく俳諧観と、深化してきた彼の『荘子』観とは有機的な関連をもって相互に働きかけ合いながら、その形成を続けてきたものと思われる。(4)

こうした外物にとらわれざる自足の心境を『荘子』から読みとるようになったことは、其角と『荘子』とのかかわりにおいて到着した一つの頂点であった。以後は大体この形のかかわりを『荘子』と持ってゆくことになる。

この餞別句会から五年目の元禄四年に成った『雑談集』には、次のような句評がある。

さみだれにかくれぬものや勢田のはし　　翁

此はしの名大かたの名所にかよひて、矢矧のはしとも申べきにや。長一橋の天にかゝる、勢田一一橋にかぎるべから

ず、と難ぜしよし、京・大津より聞え侍るに、去来が

湖の水まさりけり五月雨

と云へる、まことに湖一鏡一一面にくもりて、「水接レ天ニ」とみぬ。八景の亡ぜし折から、この一橋を見付たる、時と云、所といひ、一句に得たる景物のうごかざる場を、いかで及ぬべきや。文一章のみものにあづからずと云へる瞽者のたぐひ成べし。

（雑談集）

この評の結びのことばは『荘子』「逍遙遊」篇によるものである。

瞽者無三以与二乎文章之観一。聾者無三以与二乎鐘鼓之声一。豈唯形骸有二聾盲一哉。夫知亦有レ之。（瞽者は以て文章の観めに与らず、聾者は以て鐘鼓の声に与ることなし。豈に唯に形骸にのみ聾と盲とあらんや。夫れ知にも亦これありと。）

芭蕉の句は元禄元年の作、去来の句は『曠野』に載っているものであるから、この句評は其角の元禄元年七月の上方滞在の折の経験を材料として元禄四年頃書いたものであろうか。散文であるためもあるが「瞽者は以て文章の観に与らず……豈に唯に形骸にのみ聾と盲とあらんや。夫れ知にも亦これあり」という『荘子』の所説をそのまますなおに肯定引用している。

荘子に陽の字を喜、陰の字を怒と訓ぜしも一気のはこび成べし。

『雑談集』には又このような説も見られる。ただし『荘子』には「陽」の字を「喜」、「陰」の字を「怒」と訓じた例は見当らないようである。おそらく「在宥」篇に

人大喜邪、毗於陽、大怒邪、毗於陽。（人、大いに喜ばんか、陽を毗け、大いに怒らんか、陰を毗く。）

とあるのを指すのではなかろうかと思われる。一気の動静によって陽・陰が生じるというのは、すでに老荘にも見られる思想であるが、むしろ宋学においてよく説かれる所であるので、其角はそのあたりの記憶を混線させているかもしれない。

『雑談集』には、もう一章、

自性といふ題にて、

安心の僧もかなしや秋のくれ　　枳風

或僧頼(ママ)じて云、安心の上に悲みなし。かなしめ秋のくれといはゞ可レ叶と。おもふに「や」は休め字にて、たゞ悲しめと云る句なれば、物我(モッガ)のへだてなく、天地一己の自性を云ル句也。（以下略）

という条がある。この「物我」対立を否定することがあきらかに「斉物論」の思想であることは、小西甚一博士が説かれた通り[5]なので引用は省略しておくが、右の文に見るような禅と融合した形（物我のへだてなく＝天地一己の自性）でも『荘子』は其角に受けとられていたのである。

元禄六年八月二十九日、其角の父東順が没した。その約半月前の名月に其角は次のような句文をものしている。

百里に糧を裹(ツヽ)み十里に三喰すといへり。されば父病て遠く遊ばれず。をの〳〵賀に燕す。

名月は十歩に銭を握りけり　　（五元集）

この詞書の「百里に糧を裹み十里に三喰すといへり」は、芭蕉の『野晒紀行』に引用されて有名な「逍遙遊」の

適二莽蒼一者、三飡而反、腹猶果然。適二百里一者、宿舂レ糧。適二千里一者、三月聚レ糧。（莽蒼に適(ゆ)く者は三たび飡(くら)ひて反れば腹なほ果然たり。百里に適く者は宿(よひ)に糧を舂(うすづ)き、千里に適く者は三月糧を聚む。）

の条に拠っている。これは思想的に『荘子』に関係があるということではなく、ただ病父の傍で月見の宴を開くことを述べるのに、『荘子』の文章を文飾として用いたまでである。

芭蕉存命中の其角の作品で、『荘子』とかかわりを持つものは、大体以上のようなものである。元禄七年十月以後の作品をつぎに見ていってみよう。

元禄十年刊の『末若葉』には、

自得

蝶を噛て子猫を舐る心哉

という句が見える。「蝶を噛て」というのは、いうまでもなく『荘子』「斉物論」の胡蝶の夢の故事に拠っているのである。そうすれば、題に「自得」というのも、やはり『荘子』の自得の思想と関連を有するものであろうと考えられてくる。このことを考察するについては、芭蕉の自得の境地と『荘子』との関係が参考になる。貞享二年から三年にかけて、芭蕉には、とくに『荘子』から得た「自得」の心境を語る作品が多かった。「自得箴」の一文がそうであるし、「蓑虫説跋」では「静かに見れば物皆自得すといへり。」ともいっている。俳句では、

物皆自得

花にあそぶ虻なくらひそ友雀

という作品もあり、また、俳文「四山瓢」と文末の

ものひとつ瓢ハかろき我よかな

も、やはり「無能不才」を抱き、逍遙遊の境地に「自得」のやすらぎを得ている心を示すものである。こういう芭蕉

の貞享二、三年頃の境涯に其角はじかに触れていたわけであるし、「自得」の心境・境涯を告げる作品も芭蕉から直接示されていたはずである。そうした過程を通じて、其角の虚栗調も次第に純蕉風化し、『荘子』とのかかわりも内面的に深化していったことは、さきに見たとおりである。このことは其角の精神に深い薫染を与えたわけである。そうした当時の師芭蕉のイメージが、元禄九～十年頃の其角の安定した心境によみがえってきて、自得の句になったものと解釈される。元禄九年に出た其角一門の独吟十歌仙『若葉合』、翌十年に出た『末若葉』などを見ると、彼が知巧に傾いてきているけれども、軽妙な調子、明るい気分にひたって落着きを得ているさまが窺われる。このように彼の作風が安定して、師の遺した新風に移らないので、去来は京都からはるばる書を送ってこれを批判したが、其角はこれに答書を返さず、去来の書簡を一部改めて、『末若葉』の巻末に掲載した。これが原因になって、許六と去来の間に論争が行われるに至ったことは誰も知るところであるが、亡師の新風を継承し発展させようとする熱心な去来などからは停滞とみなされるほどに、安定し、従って彼自身からいえば「自得」の心境に在ったわけである。しかし、この自得の心境は、『荘子』本文によるよりも、むしろ、郭註・林註を通じて得られたものであることは、芭蕉の場合と同様である。これらの註を媒介としたものであるにせよ、其角の『荘子』とのかわりは、内面化し、深化し、沈潜したものになってきた。

『類柑子』は元禄十六年（其角四十三才）頃に草稿が成ったようであるが、その中には次のような句文が収められている。

朝ゃに三盃、暮に四盃とさだめしに、夜分は其数を破りて、心のまゝにくるへる猿あり。郊外に踊り、橋上をわたる。猿町の里はなれたる庚申塚に休みて、断腸の吟、雪の中にこゞへたり。

晋子

其句五

欄干や柳の曲をつたふ猿

蝶飛や狙をよび込原屋敷

猿の寄る酒屋きはめて桜哉

かなしとや見猿のためにまんじゆさけ

腸を塩にさけぶや雪の猿

（類柑子）

この文は、『荘子』「斉物論」の「朝三暮四」の譬喻に典拠を有っている。

労二神明一為レ一、而不レ知二其同一也。謂二之朝三一。何謂二朝三一。曰、狙公賦レ茅。曰、朝三而莫四。衆狙皆怒。曰、然則朝四而莫三。衆狙皆悦。（神明を労して一にせんと為めて、しかも其の同じことを知らざるなり。之を朝三と謂ふ。何をか朝三と謂ふ。曰く、「狙公のさるに茅を賦ちあたへて曰く、朝には三つにし、莫には四つにせんと。衆狙皆怒る。曰く、然らば則ち朝は四つにして莫には三つにせんと。衆狙皆悦べり」と。）

自らに課した節酒の制を破って、酔って風狂に耽溺する自分を朝三暮四の寓言によって戯画化しているのである。ここには、彼の洒脱、俊爽といわれる面が示されているが、また自己の愚かしさ、空しさを見つめる冷やかな自己凝視のまなざしも感じられる。「断腸の吟」というのは、漢詩的境地の俳諧化にとどまるものではなくて、自己の上に加えられたきびしい内省からおのずとしぼり出されたものであろう。朝三暮四の寓言を、ただ譬喻のおもしろさによって用いているのではなく、また単に語句を取ってきているだけではなく、自己が俳諧において「労二神明一為レ一、而不レ知二其同一也」という状態にあることを告白したものであろう。朝三暮四の寓言に含まれている『荘子』の

思想に照らして、自己の在り方を見つめているのである。それであるから、断腸の吟五句においても風狂に狂う自己をどこまでも「猿」として描き続けているのである――ただの猿ではなくて、「朝三暮四」の寓言の中の猿として。

第二句の狙をよびこむ「蝶」も、「胡蝶之夢」から出て来た蝶である。其角はここで、胡蝶の夢の寓言に託された「物化」の思想から、自己の風狂のすがたを見ようとしているのである。

このように、晩年の其角は、「斉物論」の思想に深く内面的に相わたるようなになってきている。ここに其角と『荘子』とのかかわりの到達点を見るのである。

……近来の冠付は、教へかた、先褒美の盃よりも起りて、専、人の本心をくるはせ、放財ものにしたり。……端々、町々、手寄よき所に看板をかけならべ、夜に灯を挑て群集したり。風雅の狐狸なれば、弦をのがれて産業となる事、和光同塵のことはり、魔仏一如の見ゆるし成べし。……（『類柑子』歌の島）

『類柑子』には、また右のような文章も見出される。ここにいう「和光同塵」はいうまでもなく『老子』に出典を有する。『荘子』と関連して、『老子』的な考え方もやはり深化した心境において受けいれられている。「和光同塵」は成語として用いられているのであり、『老子』とのかかわりをまで考えるに及ばないということもいえるかもしれない。しかし、さきの「知者不言」の場合と同じように、老荘と並べて読んでいたものと見る方が自然であろう。この一文においては、冠付の宗匠達の「産業」を一応それはそれとして認めている。これは晩年の芭蕉が門弟達のそれぞれの在り方に対して無碍の心境を以って寛容の態度をとったのと相通ずるものを持っている。すべてものの自ら然るところをよしとする順物自然の境位を其角なりに持ち得たものといえよう。其角門の亀毛が『三上吟』の跋で、

晋子帯二妻児一、莞二塩米一、使レ酒ヲ啖レ肉、毎往二来軟紅街一中二。其作新奇壮麗、不下以二先師一枯澹ヲ為上レ範ト、

蓋能ク得テ翁之心ヲ一、而不レ践マ翁之跡一者。是又非二世俗境中ノ人一也。

といっている。「是又非二世俗境中ノ人一也」というのは、やはり其角の性格と晩年の境位をとらえているものといえよう。

以上、其角の生涯にわたる『荘子』とのかかわり、それに付して『老子』との関係を見て来たが、そこには、やはり其角の作風の展開と関連して深化してきている過程が見られる。

芭蕉の指導の下に、蕉門を挙げて『荘子』の探究に競い立っていった延宝七年から八年にかけての一年余りの期間は其角が意識的に文学と『荘子』を結びつけようとした第一の時期であった。談林寓言論を超克しようとして、自らの俳諧観とその上に立つ表現方法論を模索し、『荘子』にひたむきに挑みかかっていったが、そこではまだ談林寓言論の壁を突き破れなかった。その努力は、『桃青門弟独吟二十歌仙』の作品に表現されたが、まだ『荘子』を奇抜でおもしろい寓言（林註的意味で）の書として受け取るレベルを越えられず、『荘子』の表現のおもしろさ奇抜さにのみ引かれ、作品は『荘子』から寓言やその表現・語句を取って来てはいるが、内容・表現のいずれにおいても、奇警さ滑稽感をねらうだけのものになってしまっているのである。林註による『荘子』の受けとり方であり、それも表現面だけで受けとり、内面的なかかわりを持ち得なかった。

ついで延宝八年八月の『田舎句合』所収の発句において、彼は『桃青門弟独吟二十歌仙』「月花ヲ医ス の巻」のレベルをついに一足超え得た。『荘子』に幾重にも依拠した二句において、彼は、『荘子』の思想の俳諧化に成功した。「月花ヲ医ス の巻」においては、『荘子』の俳諧化ということは外面的な滑稽化と同意味でしかなかった。しかし「鳶に乗て、「壁の麦」の二句は、一種の格調をもって、『荘子』の「逍遙遊」の思想を形象化している。それは知巧性にすぎ

るとともに、ひどく生硬であり、寓意があらわで、詩的昇華が十分ではないが、しかし単に寓言のおもしろさ奇抜さに興じているだけではなく、『荘子』の思想内容を問題とするに至っている。もっともその論理をまるのみにしたにすぎず、類型的で、未熟で、『荘子』と内面的な交流を持つまでには至っていない。それにしても、『荘子』に含まれている思想＝理についに俳諧の表現を与え得たのである。談林寓言説の広大な壁に、突破口をあける難事をなしとげたのである。それは延宝末の俳諧革新の時代において、その先端を行くものであった。

延宝九年六月の『東日記』所収の「読荘子」の句においては『田舎句合』の線よりもむしろ後退した感じさえ見られるが、同年七月の『俳諧次韻』においては、『田舎句合』における達成を連句の上にも持ち来たした。こうして、『荘子』の思想と寓意表現は俳諧文学にとり入れられた。そのことを通して、寓言論は表現の奇異滑稽にのみ重点を置く談林的な一面性を超克して、思想内容＝理をとりもどすことが可能になった。談林の遊戯的な俳諧観、表現方法論は揚棄されてゆき、『荘子』の思想と寓意的表現方法を自覚的にとり入れた俳諧の本質観と表現方法論の形成が見られ、俳諧革新の基盤が準備された。

この基盤の上に立って『虚栗』の作風は展開された。其角は芭蕉と並んで『荘子』を典拠とし、その語句を取り用いながら、表現に文学性を与え得るようになった。内容はまだ『荘子』を十分に消化し得ず、表現もまた生硬ではあるが、寓意的表現方法は確立され、「佗と風雅」を本質とするに至った俳諧文学は、談林の俳諧観と方法論をほぼ完全に揚棄した。古風・談林を俗流俳諧と見下し、自らをひとり高しとする孤高の気負いがそこには見られるが、それも「無用之用」の思想によって立つ風狂の意識から生じて来ているものである。

こうして、俳諧の革新はなしとげられ、「天和調」の時代が現出した。ここまでは、其角は芭蕉に指導されながら芭

蕉に遅れず『荘子』の探究を続け、それを俳諧観・表現方法の革新と結びつけて来た。時には其角がむしろ芭蕉に先んじる傾向さえも示し、芭蕉と『荘子』とのかかわりの世界をささえ、荷担してゆくものとして前進を続けて来た。しかし、一たん天和調が形成されると、其角は既得の作風と名声・地位に腰を据えてしまった。彼の『荘子』探究は、以前のような積極性を失っていった。その間にも芭蕉は『荘子』との間のかかわりを深化することを止めず、そのことを通して蕉風を展開していった。其角は、そうした後からついて行く――自分の過去の作風を引きずりながら――ような形になっていった。貞享四年十月、『笈の小文』の旅に出立つ芭蕉への餞別の四十四の第三、鳥鷄の句に示された「自足」の境地に対する理会と関心は、其角と『荘子』とのかかわりの在り方と深度とを示すものであった。これは貞享年間の芭蕉の自得の境位に従うものであろう。この自得の思想は、「俳諧の誠」という理念と内部的な関連を有するものである。そのことはやがて元禄四年の『雑談集』に示されることになる。そこには、

俳諧に新古のさかひ分がたし。いわば情のうすき句はおのづから見あきもし、聞ふるさるるにや。又情の厚き句は、詞も心も古けれども、作者の誠より思ひ合ひぬるゆへ、時に新しく、不易の功あらはれ待る。

という説が見られる。「不易」の思想が『荘子』から出ているものであることは小西甚一博士の証明するところである。(6)「不易」の思想も、「俳諧の誠」の理念も、芭蕉から受けたものであり、其角の発明でないにしても、こうした思想を師から受け取ることができたのは、やはり其角自身における『荘子』理会の基盤なしには十分にはなされないことである。彼が『荘子』を、やはり読み続けていたことは、同じ『雑談集』所収の芭蕉句評や、『五元集』・『萩の露』などに見える「名月は」の句文からもうかがえる。

貞享以後も、芭蕉存命中は、『荘子』とのかかわりにおいても、作風においても、やはり師の歩みのあとに従った其

角であったが、師の没後は、彼の性格から出る都市的・知巧的な句風に傾いていった。しかし、彼はそこに彼なりの安定した展開傾向を持っていって、元禄十年の『末若葉』には「自得」と題する句を出したりした。これを通して見られることは、其角は、この時期に至っても、貞享年中の芭蕉の「自得」の境位を思い続け、それを自らの心境の上に重ね合せていたということである。

元禄十六年頃に執筆したと思われる朝三暮四の句文では、「斉物論」の思想に拠りながら、酒に耽溺し、風狂のかぎりを尽す自己に深い内省の視線を向けている。どんなに酒に酔い、風狂に身をまかせきっても、自己凝視を止めることのない、自己を見つめる眼がこの句文の奥に光っている。ここに示された其角の自画像には、酔態風狂に正体もない様のようで、どこか醒めている精神がある。自己の酔態・風狂が、どんなものであるかを知っている自己の中の自己である。「斉物論」は冷く、きびしい事をいっている。「労二神明一為レ一、而不レ知二其同一」と。其角はここで、それを肯定し、受け容れている。そこに、一種のユーモアとペーソスが生じてきている。常にウィットを中心としてきた其角のおもかげはもはや見られない。ここへ来て、其角は自らの生涯の風狂を省み、その内省において「斉物論」の思想の把握を試みているようである。以前の其角には見られなかったことである。こうした心境は、同じ『類柑子』の「歌の島」の一文にも見られる。「和光同塵」のものの見方に立ち、堕落した業俳の在り方も許容している寛容の精神は、自己に対するきびしい内省の精神と表裏するものである。彼は「斉物論」の論理から「順物自然」の思想を自己のものとなし得て、このような無碍の心境に達することができたのであろう。芭蕉には遅れたが、其角は其角なりに『荘子』とのかかわりにおいて、この高さにまで到達したのである。それは林註によるものであるにせよ、やはりまた「世俗境中ノ人」をたち超えたことであった。作風はまさに風狂の中に遊戯(ゆげ)するものとなっている。外的な事

象への興味に流れ、理知的なおもしろさに堕していったといわれる通説の枠をこえるものが、ここには見られるであろう。

其角と『荘子』とのかかわりの展開は、結局次のようにまとめられることになろう。十代の終りから、二十三才の『虚栗』までは、俳諧革新の原理と方法を求めて、師の芭蕉と一体になって、ひたすらな『荘子』探究に熱中した。これは他の江戸蕉門の俳人達と同じである。しかし、その後は、やや固定した「逍遙遊」の思想、「無用之用」の在り方などに自得の安らぎを求め、あまり積極的に『荘子』とのかかわりを求めず、むしろ、これを漢詩文一般、儒学、仏教などと多方面にわたった彼の知識・教養中の一要素として持ち続けていった。貞享以後は「逍遙遊」「斉物論」以外に相わたる作品がない、というのが積極的に読まなかったことを物語るであろう。彼と『荘子』とのかかわりは、このような形で、具体的には芭蕉の貞享時代の自得の境位を後々まで思っているという状態であった。しかし、晩年には、自己の風狂に対する内省から、「斉物論」の思想とかかわりを深めるるようになり、ついに「順物自然」という無碍の境地に到り得た。それは其角が彼なりに持った『荘子』とのかかわりの展開のピークであって、そこで展開の体系は完結した。芭蕉は、生涯にわたって自己の文学の展開を求め続け、作風の大きな転換期には、つねに大きく深い苦悩に陥り、その危機意識から『荘子』とのかかわりを根源に立ち帰っては求めなおした。其角のそれは、天和の『虚栗』で終った。そこが『荘子』との関係の持ち方において、芭蕉と其角との異る点である。しかし其角も風狂を求め続けることを通して、最後にはその生き方と文学を「斉物論」の「順物自然」に合一せしめ得たのであった。その点でも彼は、やはり、芭蕉の高弟たるの名に値するものと思う。

〔注〕

(1) 広田二郎稿『桃青門弟独吟二十歌仙』と『荘子』（小樽商科大学「人文研究」第二十三輯、一九五九年一月）。
(2) 同　右。
(3) 『田舎之句合』第九番、「左は虚也。」
(4) このことの基礎には、芭蕉の俳諧理念と誠との関係が考えられるのであるが、芭蕉のそれについては、すでに小西甚一博士によって説かれている。小西甚一稿「芭蕉と寓言説」（「日本学士院紀要」第十八巻第三号、一九六〇月十一月）。
(5) 同　右。
(6) 同　右。

其角と老荘